二十六 八月四日より
同 十四日至る

壬子之日記

栗葉

特別
へ5
6581
26

へ5
6581
26

八月四日

晴天霖雨 巳刻以時 陸の折るる雲

[illegible]

探題

[illegible]

白選

〈98-41〉

白選

右

右

右

光貴

探題しはらくの八郎
好ミ口安栄
打のへ々浦の香掛也秋をも紅え
連の手也 松風の之さ 手郭
のくれる也 芳の紫り〳〵翻飛
山深也 荒屋しの 村の崇
行りとり 明鏡ろし 蛍の水
古御ふ也 旅に宿の 旅居に
仙畑

岩室の佛とを折り 秋のゑ
猶安也り 深さもし 谿の底
明也 鼓吹八郎の又のあかれ木

右

記は年明るもたらし いりと出鉄をへとて子案内の国もかくま
ふ法照も記をたとぬ 口究竟のすれ げふりと別れて見
東雄出ち 今こ出立勝浦の上の新気芳年の夏なりしに旅勢
の跡とる 来迎中 臨存顔なりし 勢紙岩村にて 口五株子の信

皆土蔭田に出ゝ西ちこゆ千ら寄ありて殺く得要んそる
大田の野ゟ出ぬ例の古都の茶屋か楚ら茶をうつて寸わ
中り候ゝ合堂のちゐして八ツ時口田山まのまかゝ本殿の屏
ヱ太輔し転ゝ風流まゐまゝ田に一池やゝけ経大史纔身
緑寺ゟ政出前の田かうら海末西にみかゝあゝし千寺へ紀
しておゐうせんとし消も勝楯ゝ旅り初えあらかく有ゝ旅
治ゑ可ゝて者性うんとこひし柝しあれて垂みしてゝ千寺跡
随ふ例しらるゝ（ゝ）ゑ家擇日列

秋と云一字

秋をかし霧鹿ありは見えけり　雄加

中々に風の乱れあはれ人の秋　〃

秋のゆふ椿垣隅てゝ下ゆく　〃

秋うちもや下ゝ妻乃呆車　〃

けのかゆ海鐘しうき松の色　田山

秋乃さし村しゐとめりる雨の足　〃

右

秋

[illegible]　仙加

[illegible]

[illegible]　同上

[illegible]

[illegible]　仙加

[illegible]

[illegible]　同上

右

常ならへことに力ありけるは故障なく来る何くかの
寺へ入の安らく強く長谷寺とかや摩訶の旅杖も
早うもし御朋友の紙帳に入られぬ東の方のむかしの親
入ま於ほ縁の様子にて服紗の案せあるは花くも衣掠ひ
此田山にも麻くをしり

長き夜も九品の法の長谷寺の秋　似郎

五日

曇天　午時分より新

朝六ツの鐘を合図に田山を出立して國民へ詣ける
茅屋の庭の萩など秋の花も勝れけれは清閑

稲　蝸牛の村雨の橿　似郎

かく清水の中に所々の宗匠を見かけ石を立て
両面清水都よりかの国の文人の額にかけて賞す
此ものは九かゆ経るに田山も寺に傳へけるも
同山の子鍛冶の家にて二人の子供に与へ付ける文
常なる人に逢ひて今後ともえらびし流行をしけし

先頃の事も記時未書物ら成るに書取ら列式

御ゆるしあれ誰ぞ宝女人此の路

戸ハきうしき桜の花の咲乱るゝの枕

銅也一筋の錦しけり

薮や長柄も打く乱れけり

川常

志圭

右

御所の是利の御所をしつけ事世之家元まうす金子

禁裏とまうさしく歳刻一筆しけ之家の書様

まうらまうしそをまうにて寛の程人に翁といふ人ある

お連絡し其中之宮の尊の輪へ出入る御せらるれば

つかふまうも親の家業をも御厚の中にも己之女

御所にて絡子ねうさ参け　御加

又御中御殿に然ら見に座

総ての是利の事く多々之家をうちかへ南中よくしるけ

日本にも鮮しくめて大の豊かに有らて鉄漏

大臣へ謝け申己人へこのみかけ川事也

和尚ハ高弟也仙台の産太虚山主の傳てさんとあらはし
霰ハ千代経しうして家のかくし稀てそおかくしけり左様
年経ハ梅花を伸ひて鳴し乎何来道師之退
前夜ハ配宴の席に出て中田氏か会たりける人々を
まて賀集して花鳥の社中しそれり遊歴ハ
和尚と法中○彦田氏か紙縁なとハ当所連を
打ち鶴氣ハ絶へしきもりふ所代の移りして○勧耕ハ
諸人の行道まて彦雲の分経へし何来之志と知とそり

いまくも人ハ元来福泉人眠れといひ花のありの門人そ
喚しは昔経りて出来して付来りハ人々と打興する

六日 晴天 若葉の亭に入て休息小杉垣

朝夜経て雨堂より勤行例の如し寺のいまい花のそ
ゆくやまの古き邸に経てしてとは雑炊を好物とて新来
野僧の家より風流乃ある中

墨台

菜種のほうへしとて経きうしぬ

錦林 風和

[illegible]

山都安藝郡何たゝる
すゝき浮ひて浮ふ花
のよ秋の田の様をはつる
枕に花くは落葉を
聲すいふ

夫の子はいくつかし乃 橙柚 紙
け錦は又いはつ利の名の物なり一類をもしらす二十種の物を
出来りとも國において書てつたへけるを人は丹羽の年

毛勝號を見はれし蒲萄といふ名の物にて十月のころ造る
玉藻をは持たしなり出さぬる道に是の物は當國の名物
に紙高く是ハ中ものよりての物よりの所にて流れとも
け中蒔物のさらにも不飯の葉を十月三日の頃也
解折物に○四月の七日の頃より十五日の夏の所に
くの中より魚類のよき所の物に流れて其の品々
止めて好み物なのすまに入れより始めなるに流れて好
葉もていふ事果等なりに所物に面流出る東京

寺く見舞かうし打れし折節ニ雨の降出し東道より先へ行

僕ハ草包とも引被り跡より遣しけり

引被て花に行くや雨の木隠　紹朋

引りくるかはらぬ僕ヶ足の陽炎もみえくりしな　东策

ふつか馬人陽氣見舞の寄秋行りハ入口ら寄るゝ見へて

使ヶ野茶飯くん元旦之趣をもとこゝに書直るゝむ

御請ケ之事書しるゝ付おけり

このころの毒もち込も入けむ　法ゑ　紹朋

ちとせや御在の雪のゆかり　左厂　东策

庭帯りもとまし御の聖　専紅

名月や雨のつらくかゝりくるも

野の原や藻寐引よ落ちるやう

中秋や歎の小枝かり夕みえし

秋にかれ鳳継けさとし新彰

右之書出

ふる狐の膝かうしに中の聲つゝく岸にかゝる氣かく

藤なとかつらなりてよもの旅人見わたし東海[illegible]
句もまかりつゝみなるも入来るもの四顧をかへり見く
いさよふ東海の[illegible]にさかゆ

[illegible]枡稲献堂

神垣ハ乃やしめ乃社らし
やよの秋帳く見ても時雨ハ[illegible]
傍[illegible]の[illegible]とまうし田をり
下馬札[illegible]と讃ふ[illegible]

よさしみその立つあまの[illegible]

七日 快晴 朝霧 [illegible]

かゝりハ[illegible]の中の[illegible]
あ家ともに出ぬる[illegible]
月[illegible]
[illegible]
[illegible]

杖つきや[illegible]

[illegible]

幾曲も眺てうつる高　　　けう桂山

こいのまこあるころくもちるる梅

朽ちも迷り囲みて庭よ雨

夫れもしや我川昔沼の声

雪まてつゝ有の見渡りのも

野菊山田の如く岫川錦

清水のよこまで風しさうのを

右

けふゆひ出てる春の南縁にて酒錦別れて家人

所に出送らるる事に返しも寄る

小川ゆりゆ如とし一面に種分れて湖漁渡りて出て明りより

秋夕

涌川や縁さましく沙のくれ　　　仙朋

此頃の初冬とうとて鳴声打もぬ何其旅客花陰

を安場所で人いはれ塩くらうるる気の合本大すゝ稲くく

就るてあるるゆとやうけ立るよ出家より平塚源治の

遠目ミゆる白小佐々別れの音す淋しと沈めりし大茂寺なる
りふもと此地能く台ゆう遠見のよし亦ハ物哀ひし湖見
みるも又汐が森○小竹といふ所佐屋文あとくる前の
遠目ミえたりて東風口勢ふ前茂程ろう庭細しま
崎々奈西湖のなり月中なる音り尊れたし汁草道
東山世なくてもまし宿ふ工房して尾張すくる出勝ま

一 絵

嵐にし梅花終も二ゑ々のたれは寄と

春の日に随陽帝の重出ふ寺也尋と
法明り名ろ知めくの紀

廣帆子

高玄寺七

龍虎寺行

此一對の句にて以真葉出風門の稀宗寺廊晴山長安寺
みて姉さ加へ家地勢開寂として境内高静
に詩師嘯石翁等の高名いは見音々の額御掛けり
そこなん尾張ゑ嶋陽にて伴庭へよるも帰るゑ唐山まねり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

石

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此度の事の様子を聞て国元へ帰るとの事
なれども出りて拾貫の為
作りぬ○樫原の市にて
新平主人に出会て酒中の用事を済し上京する
筆れ別て酒肴しかの為の事の作り神
酒の用意し仕度の為作りぬ
やうしかを書とる
今朝の初二ツ　井指

此度の出会の上にて作りぬ
三度の酒肴の用意
酒肴は一通り
三品ある中に二種
新しく酒肴
新しく酒肴
寒熱
九日　新酒　午四時
此新酒の酒肴
新酒の酒肴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋篠寺の鐘の音の聞かれる時　仙郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

阿人

井指

阿人

井指

阿人

井指

阿人

井指

阿人

右

井指

阿人

井指

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十百

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

丁六

素白

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奇城

[illegible]

右一

[illegible]

十二日 晴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此ものあるを聞く

秋深み

夕ぐれの秋の入江の蘆の穂　みは

折ふしも折ふしの雨　吉山

ぬれぬれ世あるとぬれの雨

物ごとの新しかりし秋の光雨

ぬれぬれと初めの日　橋雪

ぬれぬれ嫁ぬれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

指ゝ[illegible]前書の為ゝ[illegible]

[illegible]ゝ方々の詩集[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四日　朝雪

朝夜[illegible]佛[illegible]

折[illegible]の美[illegible]朝[illegible]の[illegible]

[illegible]東濁[illegible]一二[illegible]

鎌倉眺望　　藤惟香

春日海邊好　鎌倉佳景開
潮平江島出　景色不人間

石

今

仲秋望月

山中白露秋　偶上一津樓
水面波濤起　如龍月影流

同

秋風拂百塵　千里月光新
樓外山川色　乾坤遊獵人

繹義白

七

夏日登宣城擔山

釋義白

頂上橫雲宣山嶽高
渺然湖水起波濤
宗風蕭颯心情淨
聊弄景光輝彩毫

今

恨白髮
百慶百伎送春秋
百感深心百感浮

今日鏡中看白髮
可惶百感百心愁

梅花樓

二月山亭梅樹花
梅花春香如御苑
東郊何處梅花笛
何人裏聲落梅

石

淺原日輪寺上人

東都儒生
把天竹香

聖堂祠
日野藤助惟香
無為行成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御羅の事なれ
ども御指図命の
事則ち唱ふるものあるべ
一天祈願寺ちかく
所に吹きもの多く琴
笛を飲之し御
笛に芋ゐ門命て
之ちゐ事なるべ

加之
加之
加之
加之
加之
加之
加之
加之

家に家本寺ゐ撥ゐ使ゐ
陣ゐ陣ゐ之ゐ之ゐ吹
打鼓ゐ指ゐ鉦ゐ鼓ゐ
人数ゐ之ゐ
道具ゐ持ゐ行ゐ音楽
ゐ入ゐ祝ゐ之ゐ

右

[illegible]

例[illegible]

文選傍[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]